

日本エッセイスト・クラブ

2021 秋

NO.73-I

会報

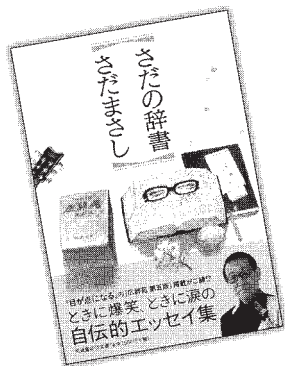
第69回クラブ賞受賞作



第69回 日本エッセイスト・クラブ賞 受賞

さだの辞書

さだまさし



ときに爆笑、
ときに涙の自伝的エッセイ集

「目が点になる」の『広辞苑 第五版』収録をご縁に、
家族・故郷・ご先祖様、友・仲間・恩人、歴史・
土地・希望、本・音楽・映画を25の三題噺で語る。
温かな人柄とユーモアとセンスと……。多芸多才
の秘密も見えてくる。

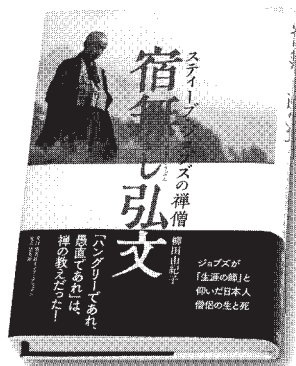
四六判・定価1650円

岩波書店



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>

第69回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞!



『宿無し弘文』 スティーブ・ジョブズの禅僧

柳田由紀子 著



スティーブ・ジョブズが
生涯の師と仰いだ日本人僧——
その生涯を追い求める
骨太ノンフィクション!

定価2,090円(税込)

集英社インターナショナル

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町1-5-18
<https://www.shueisha-int.co.jp/>

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2021 秋

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

第69回日本エッセイスト・クラブ賞

クラブ賞贈呈式

審査委員長報告

受賞作の紹介

受賞の言葉

エッセイスト賞受賞の御礼に代えて

會長・齒痛・ポリネシア

笑わせてあげることだよ

クラブ賞一覧

会員近況

自著紹介

2021年度定期総会

事務局から

日本エッセイスト・クラブ定款

会員名

委員長 松本 仁一

委員 堀尾眞紀子

委員 佐々木健一

さだまさし

柳田由紀子

42 40 36 34 33 28 22 16 11 8 5 3 2

2021年 第69回 日本エッセイスト・クラブ賞



『さだの辞書』

岩波書店

さだ まさし

シンガー・ソングライター、小説家



『宿無し弘文』

ステイブ・ジョブズの禅僧』

集英社インターナショナル

柳田 由紀子

作家、ジャーナリスト

第69回日本エッセイスト・クラブ賞は、6月28日、東京・内

幸町の日本記者クラブ内で贈呈式が行われ、上記2作品に賞状と賞金(各30万円)が贈られた。

贈呈式は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、前年と同様、会員全員の出席までは求めない形式で行われ、松本仁一審査委員長が審査報告。続いて、受賞者のさだまさし氏が壇上で、米国在住のため母親の美枝様が代理で出席された柳田由紀子氏はオンラインを通して、それぞれ受賞の喜びを語った。

1953年(昭和28年)に創設されたクラブ賞の受賞者は、これで191人になった。

第69回クラブ賞贈呈式

審査報告

エッセイと評伝と

審査委員長 松本 仁一



第69回日本エッセイスト・クラブ賞の審査経過を報告いたします。

今回は、24名の会員から推薦された作品が25点、出版社33社からの推薦が92点、個人による応募が10点、合計127点の応募がありました。このうちから、編著作品、過去作品の復刻版、著者死亡など審査基準に外れた作品を除外し、さらに3月17、18両日の予備審査を経て、対象作品を60点に絞り込みました。

この60作品について、11人の審査委員が4回にわたって審査し、6月1日に受賞作品2点が

決定いたしました。

昨年に続き、今年も審査はコロナ感染の影響を受けました。期間のほとんどが緊急事態宣言にかかってしまったのです。まだ寒さの残る時期だったのですが、窓を開け払った中で審査が続けられました。そんな状態でも、感染者をだすことなく最終審査を終えることができ、審査委員一同、ほっとしている次第です。

最終審査に残った作品は以下の5点です。

さだまさしさん『さだの辞書』

下山進さん『アルツハイマー征服』

門玲子さん『玉まつり』

柳田由紀子さん『宿無し弘文 ステイープ・

ジョブズの禅僧』

上間陽子さん『海をあげる』

今回も、いつものように「エッセイスト・クラブ賞の対象であるべき作品」について議論がありました。議論の末、最後まで残ったのは、まさにエッセイそのものであるさだまさしさんの『さだの辞書』と、新しいタイプの評伝とい

える柳田由紀子さんの『宿無し弘文』で、おのずとバランスの取れた結果となり、その2点が受賞と決まりました。

おめでとうございます。

お二人のますますのご活躍をお祈りして審査報告といたします。

審査委員

委員長

松本 仁一

委員

秋岡 伸彦 海老沢小百合

佐々木健一 高村 壽一

内藤 啓子 原田 國男

降幡 賢一 堀尾真紀子

よしだみどり 吉野源太郎

受賞作の紹介

切なく温かい歌の秘密が見えてくる

さだまさし著 『さだの辞書』

審査委員 堀尾 眞紀子

この本を手にしたとき、『さだの辞書』というタイトルに「目が点になった」。ん？。

この言葉は一九七〇年代、さださんの周辺で、漫画の主人公が驚いたとき目が点で描かれるのを面白がって広まったという経緯を読んで、また驚いた。何とそれが岩波書店の広辞苑に載り、それがご縁で岩波の『図書』にさださんの連載が始まり、それをまとめたものが本書だという。小さな点が、ときに爆笑、ときに涙の見事なエッセイ集にまで繋がったことに、またまた目が

点になる。

さて本書を読んで、著者の家系にまず度肝を抜かれた。曾祖父は長崎で一番の廻船問屋の主で、町のヤクザも押さえ込む大俠客、祖父は帝國陸軍のスパイ、祖母はロシア語を流暢に話す拳銃使いとまるで小説そのもの。勇猛果敢、かつ波乱万丈、並ではない。

父は長崎で材木問屋を営み広大な屋敷を構えていたようだが、水害で全てを流されて一転、二間の長屋暮らし。かつては年末、大きな土間

で使用人たちが盛大に餅つきをしていたのに、長屋に賃餅屋から届く餅箱の中の餅の数で家計を察し一喜一憂、オロオロしていた親思いの長男が、さだまさしである。

しかし父親はどこか鷹揚で屈託なく、年末の借金取りの算段で難儀をしている母親を尻目に、まさしを連れて床屋に出かけ、終わると次は靴屋の敷居をまたいで靴を磨かせる。帰宅すると、母親もまた文句も言わず出迎えて、甲斐甲斐しくおせち料理に精を出している。こんなさっぱりしたおらかな雰囲気から、さだの人間味溢れる明るい性格が育まれたのではと思う。

そんな生い立ちを土台に、ヴァイオリニスト目指して中学一年のとき単身上京。その夢はほどなく潰え、大学は中退、アルバイトに明け暮れるなど様々な苦労と人との出会いが描かれるが、悲壮感は微塵もない。お腹をすかした仲間との下宿生活、売れない時代の地方への宣伝まわりなど、ご本人は真面目かもしれないが実に可笑しく、深夜に一人笑い転げてしまった。

かと思うと著者が縁のあった、俳人・石橋秀

野にまつわるくだりでは、幼な子を残して若くして逝く彼女の無念さを想って、思わず目頭が熱くなった。

圧巻は東大寺二月堂の、千三百年続く「修二会」に参籠した際の、練行衆の行の様子である。縁あって私も何度か聴聞したことがあるが、もちろん外の回廊の下で深夜、勇壮に駆け抜ける松明の火の粉を大勢で浴びるのみ。筆者の見事な描写で、内陣の息を飲む激しい行が伝わってきた。

この松明には続きがある。舞台から火の粉を撒き散らした十三メートルのお松明を、トラックで高速道路を運び気仙沼など被災地に灯す、という信じられない企画を立ち上げる。東日本大震災後に「音楽家は無力だ」と絶望していた著者は、折あって訪ねたときの被災者の笑顔に励まされ、休みの日を見つけてはギターを抱え避難所を次々と廻る。そしてこの不可能と思える企画を、高速道路をサイレン鳴らし追ってきたパトカーの警察官をも巻き込んで実現させたのだ。さださんに繋がる人々の思いが結集した瞬間だ。

本人は「僕には運の神様が付いている」というが、それも人との繋がりは何よりも大事にする、彼の人柄が成せるものと思う。何を突飛なことを、と思わせる現実的でない計画も、読み進むうちに可能に思えてくる不思議な爽快感が随所にある。

そのスケールの大きさがまた半端でない。東日本大震災をきっかけに、著者は「公益財団法人風に立つライオン基金」を創立するが、アフリカ・ケニアに降り立ち、ナイロビの貧民街の診療所支援、フィリピン・ミンダナオ島の孤児院、スーダンの僻地医療の支援と、世界で人知れず奮闘する日本人の手助けに駆け巡る。アフガンで命を奪われた中村哲医師はじめ、海外で支援活動をする、多くの日本人を畏敬を込めて紹介し、それを己の使命と心得ている。

もちろん国内は北海道での台風被害から、熊本の大震災に駆けつけるなど東奔西走、思わず宮沢賢治の「…東に病氣の子供あれば行つて看病してやり、西に疲れた母あれば…」の『雨にも負けず』の詩が重なって見えた。

口さがない人の中にはやれ「偽善」だの「売

名」だのとの声もあるようだが、なあに「ばくら偽善活動なんですよ」と笑えばいいのだ、という大らかさに脱帽！

こういう活動の中で出会う若者たちとの交流にも胸が熱くなる。自発的にアイデアを持ち寄り活き活きと動く高校生たちを、著者はある種の「革命」だという。自分たちの力を生かしたいというまっすぐな思いが結集したとき革命は起こり、やがて世の中が変わると。若い人たちを信じる率直さが胸をすく。

さだまさしの歌は人の心を打つ。誰でもが持つ切なさや寂しさ、孤独感を、さりげない詩と温もりのあるメロディで鮮やかに歌い上げる。なんとも人間味に溢れた彼の歌の秘密が、この本を読んで垣間見えたような気がする。

受賞作の紹介

巨大な「空白」を埋める旅

柳田由紀子著 『宿無し弘文 ステイプ・ジョブズの禅僧』

審査委員 佐々木 健一

故ステイプ・ジョブズが語った言葉。
「ハングリーであれ、愚かであれ」。

彼が遺した革新的で洗練された製品と共に、代名詞のように度々引用されるスピーチの一節だ。しかし、私は長年、この言葉の真意を掴めずにいた。後半は「愚直であれ」と訳されることもあるが、余命半年の膵臓癌と宣告された彼が、「馬鹿正直であれ」「一途であれ」という意味で、この言葉を述べたとは思えなかった。

では、「愚かであれ」とは如何なる意味か――。

私は本書を手にして初めて、そこに込められた真意、その言葉の深遠に触れることができた。没後一〇年間に数多のジョブズ関連本が刊行されたが、これほど彼の思想の奥深くまで探究し、考察できたものはない。本書はそれをジョブズ本人ではなく、ある日本人を通して描いている。『宿無し弘文』の「弘文」とは、ジョブズが生涯唯一の「師」と仰いだ日本人禅僧、乙川弘文のこと。「禅」の教えが、MacやiPhoneといったアップル製品に影響を与えていること

はよく知られている。作者の柳田氏は二〇一二年に刊行された、弘文とジョブズの三〇年にわたる交流を描いた書籍『ゼン（禅）・オブ・ステイブ・ジョブズ』の邦訳を担当し、気難しい性格で知られるジョブズが自らの婚礼の式師を弘文に依頼したことを知る。ただならぬ二人の結びつき。そこから一つの「問い」が浮かんだ。

「乙川弘文とは何者だったのか」

それはこの一〇年の間、私たちの中に燦り続ける「もう一つの問い」と重なる。

「ステイブ・ジョブズとは何者だったのか」

現代社会に最も影響を与えた一人でありながら、彼の実像は未だ謎だ。特に一九八五年に自身が設立したアップル社を追放された後、九六年に復帰を遂げるまでの「空白の一〇年」。その間、何を思い、どう過ごしたのか。帰還後の快進撃は誰もが知るところだが、その間の内面的変化に「ミッシング・リンク」が存在する。

本書は、その巨大な「空白」を埋める旅でもある。柳田氏は突き動かされるように、弘文（＝ジョブズ）の謎に迫る探究の旅に出る。読者はその七年間に及ぶ旅路を追体験していく。

まず、冒頭から度肝を抜かれる。「プロローグ」は、生前の弘文を知る人物の「一人語り」。しかも、内容は毀誉褒貶そのもの。ジョブズが讃仰した弘文とはさぞかし高潔な僧に違いないと思いい、読み始めると、「つかみどころがない」「風来坊」「実は凶太い」人物だという。「何十年も曹洞宗から離脱状態」とも。ある時は娘ほどの年齢の白人女性を連れ、ぬけぬけと「お腹に赤ん坊も」と挨拶したという。だが一方で、「出世欲もなければ世俗性もなくて」「金に興味などなかったし、めっぽう純粹な人」だという。比類無き高僧か、女好きの破戒僧か。読者は混沌の渦へ放り出される。

ジョブズはそんな弘文を誰よりも慕った。二〇歳の時に禅堂で出会い、頻繁に訪ねた。不遇時代の「空白の一〇年」には、自身の邸宅に弘文を住まわせ、独り占めにしようとした。それほど師との問答を心から欲していたのだ。

ジョブズもまた毀誉褒貶の激しい人物である。傍若無人な振る舞いの逸話に事欠かない。一方でアップル社復帰後、九七年のCEO就任から亡くなるまで年間報酬は僅か一ドル。金の

ために働かず、ミニマムなライフスタイルを貫いた。

なぜ、ジョブズは弘文を求めたのか。他の禅僧ではなく、彼でなければならぬ理由とは何だったのか。柳田氏の旅は、弘文の背中を追えば追うほど混迷を深めていく。

乙川弘文は一九三八年、新潟の古刹に生まれ、京都大学大学院で仏教学を専攻し、将来を嘱望される生真面目な僧だった。だが、布教での渡米後、生き方を反転。酒に溺れ、複数の女性と交際・結婚を繰り返す破戒僧となる。最期は、旅先での不可解な溺死で六四歳の生涯を閉じた。

良寛の如き前半生と一休の如き後半生——。旅の終わり、ついに柳田氏は矛盾に満ちた乙川弘文の「二つの人生」の謎を解く視点を得る。ある僧が言う。

「ジョブズをはじめとする欧米の人々の心は、逆に安らいだのではないでしょうか。これこそ、でいぢめう泥中の蓮はちすです。蓮華は、汚れた泥の池からすつくと茎を伸ばし大輪の花を咲かせます。泥もまた大切な命の源なのです」

弘文は願って地獄へ堕ちた。自らも泥の中で藻掻き、衆生と共に生きる道を選んだ。清高な僧として、過ち惑う者を高みから論ずる聖人であろうとはしなかった。そんな僧は滅多にいない。

ジョブズは「空白の一〇年」に弘文と最も親密な交流を持った。その後、所謂「現実歪曲フィールド」に代表されるように愚かにも自ら汚泥に身を投げ、混沌を生き、世の中を変える革新的製品という大輪の花を咲かせた。

「日本エッセイスト・クラブ賞」は埋もれさせてはならない著作と、その書き手の存在を世間に知らせる役割を担ってきた。本賞が柳田氏の労作を多くの人へ届ける一助となることを願う。

受賞の言葉

エッセイスト賞受賞の御礼に代えて

酋長・歯痛・ポリネシア

ふだまふし



第69回日本エッセイスト・クラブ賞を、柳田由紀子さんの「宿無し弘文リステイブ・ジョブズの禪僧」と共に、光栄にも僕の「さだの辞書」が頂戴した。何かを書くときに評価など気にしたことはないが、こうして改めて褒めて頂くと「不毛の荒野を孤独に歩いている」ような書き手には大きな勇気を頂く。審査員の皆様に心から感謝を申し上げます。

さて本賞授賞式の日、前夜にipadで字を読み過ぎたせいか、緊張で寝ながら歯ぎしりでもしたのか左上の奥歯が痛んで困った。

僕は本を読む時の姿勢が悪いのか、そもそも

歯の作りが悪いのか解らないが、読書の後は首が凝って何故か虫歯でもない歯痛に悩むことがある。それは子供の頃からだった。

こういう時は大いに運動をするか、風景の良いところへ旅をするかして心と身体をほぐすのが一番だが、このコロナ禍では旅行もままならない。それで夜中にiPadに入れてあるアプリ「Google Earth」を開いて海外旅行を楽しむことにしている。

空想の中でどこへ行くかというやはり一番の憧れでもあり、最も遠い南洋の島々だ。たとえば1937年当時、日本の制空権の中、偵察飛行を敢行しながら南太平洋上で失踪した飛行家アメリカ・イアハートが目指した「ハウランド島」を探してアメリカが何故この島を大切にしたのかを想像したり、明治時代の冒険家水谷新六が発見した「南鳥島」を見つけて「いつか行ってみたい」という夢を夜毎膨らますのだ。

幼い頃から「ロビンソン・クルーソー」や「十五少年漂流記」のお陰で南太平洋の島々に憧れていた僕は実際に20代の半ばに（40数年も前の

公明会青年会 新潮社 少年誌



氏さる受ける賞状から会長藤遠

話）ロサンゼルスでの録音の帰り、弟がかつて一年弱の間ホームステイしていたニュージールランドと一緒に訪ねるついでに憧れのタヒチへ行く計画を立てたが、弟の勘違いで何故かサモア

へ連れて行かれた。ハワイでのトランジットの待合中に初めてこの事に気づいて随分がっかりした。

僕は怒り、弟はしよげ返ってアメリカ領サモ

略歴

長崎市出身。シンガー・ソングライター、小説家。1973年フォークデュオ・グレープとしてデビュー。76年ソロ・シンガーとして活動を開始。「関白宣言」「北の国から」などヒット曲多数。小説に『解夏』『風に立つライオン』など。多くの作品が映画化、テレビドラマ化される。NHK「今夜も生でさだまさし」パーソナリティーとしても人気。2015年「風に立つライオン基金」設立。様々な助成事業や被災地支援事業を行う。風に立つライオン基金との共編著『ボランティアをやりたい!——高校生ボランティア・アワードに集まれ』（岩波ジュニア新書）、コロナ禍に対する同基金の支援活動をまとめた『緊急事態宣言の夜に ボクたちの新型コロナ戦記2020』（幻冬舎）がある。

アの首都パゴパゴ国際空港に着くと、早朝にもかかわらず少年少女が日本でも有名な「サモア島の歌」で迎えてくれたので僕の機嫌はやや直ったが、入管の係官とイエローカードの必要と有無で揉め、結局向こうの勘違いと判って小一時間後に無事に通関。それでまたまた少し不機嫌になって弟に宿泊先を聞くと「レインメーカー・ホテル」と言う。どこかで聞いたことがある、と少し考えてハタと膝を打った。おお、サマセット・モームの名作短編小説『雨』の舞台ではないかと、思いもかけない幸甚に小躍りする。

プールで一泳ぎした後、部屋でモームに思いを馳せていたら夕刻、空港の入国審査で揉めた係官がわざわざ奥さんを伴い、土産まで持って自分の勘違いを詫びにやって来た。なんと気持ちの良い男だろうと感激し、二人を誘って楽しく夕食をとり、タヒチへ行けなかった悔しさもこれで霧消したのだった。

レインメーカー山の麓にあるこの名ホテルは残念なことにこの数年後に航空機の墜落による火災で焼失してしまった。首が痛くなるほど真

上にある太陽もサモアで初めて体験し、果てしなく澄んだ美しい空と海に感動しつつその湿度の高さに辟易したが『雨』は一度も降らなかった。

それから僕らは西サモア（サモア独立国）に移動した。西サモアと言えば『パラギ』という本が日本でも一世を風靡したことがある。西サモアの酋長ツイアビによる演説集で、ヨーロッパを見聞して感じた文明社会への警告など箴言に満ちた名著で、僕はこれを友人に配って歩いたほどだったが後にツイアビは欧州へなど行っておらず、この本そのものがドイツ人エーリッヒ・ショイルマンによる創作であったと知ってがっかりした思い出がある。

また西サモアというと青春期に読み耽った中島敦が「宝島」の作者ステイヴンソンが晩年西サモアで暮らした際の日記から「光と風と夢」を書いている。

ここで僕らは首都アピアに英国人女性アギー・グレイによって1930年代に造られたアギー・グレイズ・ホテルに2泊した。夜9時頃小さな音でギターを弾いていたら、部屋のドア

をドンドンと叩く人があった。ドアを開くと大きなサモア人の男性が「今ギターを弾いていたのは君か？」と聞く。夜だったのうろさかったかと謝罪をすると「そうではない、今、ロビーでみんなで歌っているから一緒にどうだ」という。行ってみると10人ほどが集まって歌っている。ここでもビートルズは世界言語だった。

弟が歌声に気づいて現れ、彼らに僕が日本の歌手だと明かしたので、日本の歌を聴かせると請われて何曲かしみじみしたものを歌ったらとても喜ばれた。このあと弟とフィジーに移動してここにも2泊したのだから、随分のんびりした旅だった。

所が実はこのフィジーの辺りで歯が酷く痛み出したのだ。偶然フィジーに慰安旅行に来ていた北海道の看護師さん達と出会い、セデスを貰って数日を誤魔化していたけれど、ニュージールランドに移動して弟がお世話になったブラウン夫妻の家にたどり着いた頃、遂にセデスが切れ、寝られなくなっただけで鎮痛剤を貰うために町の歯医者に行ったら右下の奥歯が酷い虫歯なのでこれを抜くと言う。怯える僕を前に老歯医者か

ヤットコを持ち、老奥さんが僕の頭をぐいと握りしめて凶行は行われ、歯は抜けた。

毎日口の中を消毒しながら数日を過ごし、ようやく日本に帰ったのはロサンゼルスを出てから二週間の後だ。それでも歯痛が止まらないので行きつけの歯医者へ行くと先生は相当驚いた。「外国で歯を抜くなんて、場所によっちゃあ生き死に関わるぞ」と脅かしながら僕の口の中を覗き込んでいたが「まだ痛むだろう」と言う。「だから来たんだ」というと「酷い虫歯だったからあの歯はいずれ抜こうと思ってはいたんだが」と彼は高らかに笑った。「痛んでいるのは抜いた歯の隣の歯だぜ」

ああ。タヒチへ、行きたい。



受賞の言葉を聞く出席者たち

笑わせてあげることだよ



やなぎだ ゆきこ
柳田由紀子

本書、『宿無し弘文——ステイプ・ジョブズの禅僧』が世に出るまではなかなかの難産でした。いわく、

「こんな無名の坊さんの話、誰が読むんだ？」
それもそうかもと、私も思いました。

ところが、刊行してみるとわずか二カ月で増刷、今では、四刷を重ねています。その上、「日本エッセイスト・クラブ賞」という光栄な贈り物までいただいて、何が起きているのかと書いた本人が驚いています。

この伝記の主人公、故乙川弘文おじがわこうぶん師は、無欲で名を残したいなどとはこれっぽちも思わなかった人ですから、今ごろは雲の上で頭をかいてい

ることでしょう。

乙川弘文は、人間の「自力」の傲慢や限界を知るが故に、天真宇宙に身をあずけて生きた僧侶でした。人は誰も懸命に生きている。しかし、いくら懸命に努めても所詮は凡^{ぼん}夫^ぶでどうしようもなく無力だ——。弘文は、それを自覚していたからこそ、背後から押される人間を超えた

略歴

1963年、東京生まれ。作家、ジャーナリスト。85年早稲田大学第一文学部演劇専攻卒業後、新潮社入社。月刊「03」[SINKA]「芸術新潮」の編集に携わる。98年、スタンフォード大学ほかでジャーナリズムを学ぶ。2001年、渡米。現在、アメリカ人の夫とロサンゼルス郊外に暮らす。著書に『二世兵士 激戦の記録——日系アメリカ人の第二次大戦』（新潮新書）、翻訳書に『ゼン・オブ・ステイプ・ジョブズ』（集英社インターナショナル）などがある。

力に身を委ねてはからいのない生を送りました。そのはからいのなさは図抜けたもので、たとえば、弘文の法話は間^まが長いことで有名なのですが、あまりの長さに弟子たちが師匠の顔を覗きこむと、話している本人が寝ていたという嘘のような本当の話が残っています。

私自身は、弘文に逢ったことはありません。私が師のことを知った時、弘文はすでに鬼籍に入っていました。ただ、一本だけ法話を記録したビデオが残っています。ヨーロッパの山奥にある禅堂で撮影されたもので、時に弘文、五五歳。

画面に映し出される弘文の語りにはまったく作偽が見られず、天然、自然、あるがまま。適切な言葉を選び出そうと無心に首を傾げたり、虚空を見つめる仕草はまるで赤ん坊のようです。

赤ん坊のような大人——。

しかも、天真無垢な赤ん坊には邪気もありませんが、この大人にはそれもない。私などがそれまでに逢ったことのない大人が、そこにいました。



遠藤会長から賞状を受ける母親の柳田美枝氏

弘文の造作のない心は衆生無辺誓願度、純情なまでに、「迷える人々は無数にいるが、すべての人を助けたいと願う」というお坊さんの誓いへと向かいます。そして、「助けて」と求める人

がいれば、「はいはい」となんの見返りも期待せずに、本当に「はいはい」と欧米各地を訪ね歩くのでした。それはまるで、朝になれば花がひとりでに咲くのと同じように、大宇宙と一体化した自然な行為に、私には映りました。

しかし、弘文が若い時からこうだったかといえ、そんなことはありません。ある法話では自身について、「頭でっかちで高慢ちきな青二才だった」と語っていますし、京都大学大学院時代（弘文は、お寺の三男坊、駒澤大学仏教学部、京大大学院文学研究科仏教学専攻、永平寺（二九歳で布教のために渡米）の日記には、『仏陀』と題されたただならぬ緊迫感が漂う頌歌が綴られています。

こんなに身近に感じているのに。

声も姿も お見せ下さらないのは。

私をいとおしく思われるからですか。

あらゆる罪を犯し、血みどろになった

私のそばに。

どうして、あなたはおいでになるのです。

較べて、先のビデオの弘文の柔らかな無垢はなんといいことでしょう。いったい「血みどろになった私」が、五十路半ばの大の男になってどうしてああも天真でいられたのか。

栗田勇氏は、『良寛さん』（新潮社とんぼの本）の中で、

「生きて生身の人間が、心に血を流しながらも、なお、騰々^{とんとう}として天真に遊び純粹でいられるのか。この矛盾を解こうと数知れぬ人々が闘ってきたのが、日本の精神史」

と書きましたが、良寛さんと同郷、新潟出身の弘文さんもまた日本精神史の延長線に佇んだ人でした。

私には、弘文が残したなかでもとりわけ好きな言葉があります。

私たちを取り巻く感覚は、私たちの肉体の一部です。月、星、太陽、風、雨、すべては、あなたの肉体の一部なのです。

あれは、テレビでメジャーリーグの試合を見



ロサンゼルスからのオンラインで柳田氏の受賞の言葉を聞く出席者たち

ていた一夜のことでした。屈指の名外野手が神業のようなフラインプレーで球を捕えると、試合後のインタビューで以下のように応えました。

「自分が捕ったんじゃないです。観客の反応に背中を押されて動いたら、ひとりでに球がグロ―プに入ったんです」

弘文と名選手、二人に通じるのは、「自力」に頼ることをとうにやめて、「取り巻く感覚」に委ねることで周囲と調和している点です。弘文の弟子のひとり、アップル創業者の故スティーブ・ジョブズは、iPhoneなど人類の在り方を変えた数々の製品を産みましたが、彼もまた、弘文との日々で「取り巻く感覚」にたゆたひ、世界と調和することを習得したにちがいありません。

私は、乙川弘文を綴った本書にも、自分の意思を超えた外部の圧倒的な力を感じています。『宿無し弘文』は、この賞によりさらに多くの読者に出逢うことになりました。著者としてこれ以上の喜びはありません。

最後に――。

プレゼンテーションの名人、スティーブ・ジョブズにならって「最後にひとつ」。

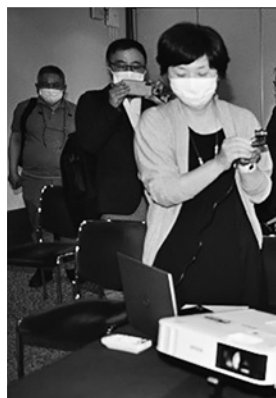
ある時、弟子から、

「人助けは何がベストだろう？」

と訊かれた弘文は、こう答えたといひます。
「笑わせてあげることだよ」

このたびは、誠にありがとうございました。

クラブ賞贈呈式



❀ 日本エッセイスト・クラブ賞一覧 ❀

第1回～第69回

	氏 名	書 名	発 行 所
第1回 1953年	市川謙一郎 吉田洋一 内田 亨	一日一言 数学の影絵 きつつきの路	北海タイムス社 東 和 社 東 和 社
第2回 1954年	島村喜久治 秋山ちえ子 須田 栄	院長日記 私のみたこと聞いたこと 千夜一夜	筑摩書房 NHK放送社 東京新聞社
第3回 1955年	木下広居 片山広子	イギリスの議会 燈 火 節	読売新聞社 暮しの手帖社
第4回 1956年	小林 勇 清水 一 藤田信勝	遠いあし音 すまいの四季 不思議な国イギリス	文藝春秋社 暮しの手帖社 毎日新聞社
第5回 1957年	小熊 捍 中西悟堂 森 茉莉	桃栗三年 野鳥と生きて 父の帽 子	内田老鶴圃 ダウイット社 筑摩書房
第6回 1958年	大牟羅 良 佐々木祝雄 松村 緑	ものいわぬ農民 三十度線 薄 田 泣 堇	岩波書店 全国引揚孤児育英援護会 角 川 書 店
第7回 1959年	竹田米吉 曾宮一念 村川堅太郎	職 人 海 辺 の 熔 岩 地中海からの手紙	工 作 社 創 文 社 毎 日 新 聞 社
第8回 1960年	高橋喜平 中尾佐助 萩原葉子	雪国動物記 秘境ブータン 父萩原朔太郎	明 玄 書 房 毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房
第9回 1961年	塚田泰三郎 宮本常一 庄野英二	和 時 計 日本 の 離 島 ロッテルダムの灯	東 峰 書 院 未 来 社 レ グ ホ ン 舎
第10回 1962年	小門勝二 小島亮一 大平千枝子	散 人 ヨーロッパ手帳 父阿部次郎	私 家 版 社 朝 日 新 聞 社 角 川 書 店
第11回 1963年	新保千代子 林 良 一 石井好子	室 生 犀 星 シルクロード 巴里の空の下オムレツの においは流れる	角 川 書 店 美 術 出 版 社 暮 し の 手 帖 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第12回 1964年	片岡 弥吉 錦 三郎 関山 和夫	浦上 四番崩れ 蜘蛛 百態 説教 と 話芸	筑摩 書 房 赤 光 発 行 所 青 蛙 房
第13回 1965年	佐々木 たづ 阪田 貞之 秋吉 茂	ロバータさあ歩きましょう 列車ダイヤの話 美女とネズミと神々の島	朝日新聞 社 中央公論 社 河出 書 房
第14回 1966年	白崎 秀雄 西山 卯三 阿部 孝	真 價 住 み 方 の 記 ば ら 色 の ば ら	講 談 社 文 藝 春 秋 社 高 知 新 聞 社
第15回 1967年	宮本 又次 安住 敦 佐藤 達夫	関西 と 関東 春 夏 秋 冬 帖 植 物 誌	青 蛙 房 牧 羊 社 雪 華 社
第16回 1968年	団 藤 重光 泉 靖一 畑 正 憲	刑 法 紀 行 フィールド・ノート われら動物みな兄弟	創 文 社 新潮 社 協 同 企 画 社
第17回 1969年	佐 貫 亦 男 戸井田道三 坂東三津五郎	引力とのたかかいーとぶ き も の の 思 想 戯 場 戯 語	法 政 大 学 出 版 局 毎 日 新 聞 社 中 央 公 論 社
第18回 1970年	仲田定之助 島田 謹二 芥川比呂志 菊池 誠	明 治 商 売 往 来 アメリカにおける秋山真之 決められた以外のせりふ 情 報 人 間 の 時 代	青 蛙 房 朝 日 新 聞 社 新 潮 社 実 業 之 日 本 社
第19回 1971年	池宮城秀意 大谷 晃一	沖 縄 に 生 き て 続 関 西 名 作 の 風 土	サイマル出版 会 社 創 元 社
第20回 1972年	堀 淳 一 角川 源義	地 図 の た の し み 雉 子 の 聲	河 出 書 房 新 社 東 京 美 術 社
第21回 1973年	鳥羽 欽一郎 斎藤 真一 樋口 敬二	二 つ の 顔 の 日 本 人 瞽 女 地 球 か ら の 発 想	中 央 公 論 社 日 本 放 送 出 版 協 会 社 新 潮 社
第22回 1974年	上 田 篤 川田 順造 早川良一郎	日 本 人 と す ま い 曠 野 か ら け む り の ゆ く え	岩 波 書 店 筑 摩 書 房 文 化 出 版 局
第23回 1975年	加古 里子 木村尚三郎 児玉 隆也 松本 重治	遊 び の 四 季 ヨーロッパとの対話 一銭五厘たちの横丁 上 海 時 代(上中下)	じゃこめてい出版 日本経済新聞 社 晶 文 社 中 央 公 論 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第24回 1976年	中 野 孝 次 渡 部 昇 一 高 峰 秀 子	ブリューゲルへの旅 腐 敗 の 時 代 わたしの渡世日記	河 出 書 房 新 社 文 藝 春 秋 朝 日 新 聞 社
第25回 1977年	沢 村 貞 子 杉本秀太郎 亀 井 俊 介	私 の 浅 草 洛 中 生 息 サーカスが来た！	暮 し の 手 帖 社 み す ず 書 房 会 東 京 大 学 出 版 会
第26回 1978年	野見山暁治 藤 原 正 彦 長 坂 覚	四 百 字 の デ ッ サ ン 若き数学者のアメリカ 隣の国で考えたこと	河 出 書 房 新 社 新 潮 社 日 本 経 済 新 聞 社
第27回 1979年	篠 田 桃 紅 斉 藤 広 志 百目鬼恭三郎	墨 い ろ 外国人になった日本人 奇 談 の 時 代	P H P 研 究 所 サ イ マ ル 出 版 会 朝 日 新 聞 社
第28回 1980年	三 国 一 朗 太 田 愛 人 小 松 恒 夫	肩 書 き の な い 名 刺 羊 飼 の 食 卓 百 姓 入 門 記	自 由 現 代 社 築 地 書 館 会 農 山 漁 村 文 化 協 会
第29回 1981年	関 容 子 古波蔵保好 両 角 良 彦	日 本 の 鶯 沖 縄 物 語 1 8 1 2 年 の 雪	角 川 書 店 新 潮 社 筑 摩 書 房
第30回 1982年	足 立 巻 一 伊 藤 光 彦 岡田恵美子	虹 滅 記 ド イ ツ と の 対 話 イ ラ ン 人 の 心	朝 日 新 聞 社 毎 日 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会
第31回 1983年	舟 越 保 武 藤 原 作 弥 志 賀 か う 子	巨 岩 と 花 び ら 聖母病院の友人たち 祖母、わたしの明治	筑 摩 書 房 新 潮 社 北 上 書 房
第32回 1984年	吉 行 和 子 尾崎左永子 佐 橋 慶 女	どこまで演れば気がすむの 源 氏 の 恋 文 おじいさんの台所	潮 出 版 社 求 龍 堂 文 藝 春 秋
第33回 1985年	関 千 枝 子 北小路 健 清 水 俊 二	広島第二県女二年西組 古文書の面白さ 映画字幕五十年	筑 摩 書 房 新 潮 社 早 川 書 房
第34回 1986年	田 村 京 子 豊 田 正 子 中 村 伸 郎	北洋船団女ドクター航海記 花 の 別 れ おれのことなら放っというて	集 英 社 未 来 社 早 川 書 房
第35回 1987年	金 森 久 雄 堀尾真紀子 渡 辺 美 佐 子	男 の 選 択 画 家 た ち の 原 風 景 ひとり旅一人芝居	日 本 経 済 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会 講 談 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第36回 1988年	北見治一 田中トモミ 山形孝夫	回想の文学座 天からの贈り物 砂漠の修道院	中央公論社 アドア出版 新潮社
第37回 1989年	河村幹夫 酒井寛 平原毅	シャーロック・ホームズの履歴書 花森安治の仕事 英国大使の博物誌	講談社 朝日新聞社 朝日新聞社
第38回 1990年	澤口たみ 二宮正之 山川静夫	虫のつぶやき聞こえたよ 私の中のシャルトル 名手名言	白水書房 筑摩書房 中央法規出版
第39回 1991年	岩城宏之 林望 山崎章郎	フィルハーモニーの風景 イギリスはおいしい 病院で死ぬということ	岩波書店 平凡社 主婦の友社
第40回 1992年	加藤雅彦 山崎柄根 山本博文	ドナウ河紀行 鹿野忠雄 江戸お留守居役の日記	岩波書店 平凡社 読売新聞社
第41回 1993年	志村ふくみ 鈴木博 中野利子	語りかける花 熱帯の風と人と 父中野好夫のこと	人文書院 新宿書房 岩波書店
第42回 1994年	伊吹和子 岸恵子 中山士朗	われよりほかに ベラルーシの林檎 原爆亭折ふし	講談社 朝日新聞社 西田書店
第43回 1995年	加藤恭子 徐京植 星野慎一	日本を愛した科学者 子どもへの涙 俳句の国際性	ジャパントイムズ 柏書房 博文館新社
第44回 1996年	石坂昌三 辻由美 柳澤桂子	小津安二郎と茅ヶ崎館 世界の翻訳家たち 二重らせんの私	新潮社 新潮評論 早川書房
第45回 1997年	中丸美繪 松本仁一 山田稔 加藤シヅエ	嬉遊曲、鳴りやま ずアフリカで寝 るあ、そうかね 百歳人、加藤シヅエ 生きる	新潮社 朝日新聞社 京都新聞社 日本放送出版協会
第46回 1998年	岸田今日子 小林和男 細川俊夫	妄想の森 エルミタージュの緞帳 魂のランドスケープ	文藝春秋 日本放送出版協会 岩波書店

	氏 名	書 名	発 行 所
第47回 1999年	小 塩 節 金森 敦子 浜 辺 祐 一	木 々 を 渡 る 風 江戸の女俳諧師「奥の細道」を行く 救命センターからの手紙	新 潮 社 晶 文 社 集 英 社
第48回 2000年	多 田 富 雄 鶴ヶ谷真一 八百板洋子	独 酌 余 滴 書を読んで羊を失う ソフィアの白いばら	朝 日 新 聞 社 白 水 社 福 音 館 書 店
第49回 2001年	青柳いづみこ 三宮麻由子 簾 内 敬 司	青 柳 瑞 穂 の 生 涯 そっと耳を澄ませば 菅江真澄 みちのく漂流	新 潮 社 日 本 放 送 出 版 協 会 店 岩 波 書 店
第50回 2002年	デビットゾベティ 日 高 敏 隆 四方田犬彦	旅 日 記 春 の 数 え か た ソ ウ ル の 風 景	集 英 社 新 潮 社 岩 波 書 店
第51回 2003年	上 野 創 黒 川 鍾 信 古 庄 ゆ き 子	が ん と 向 き 合 っ て 神楽坂ホン書き旅館 ここに生きる一村の家・村の暮らし	晶 文 社 日 本 放 送 出 版 協 会 店 ド メ ス 出 版
第52回 2004年	畠 山 重 篤 松 尾 文 夫 柳澤嘉一郎	日 本 <汽 水> 紀 行 銃 を 持 つ 民 主 主 義 ヒトという生きもの	文 藝 春 秋 館 社 小 学 思 社 草 思 社
第53回 2005年	久我なつみ 滝 沢 莊 一 竹 山 恭 二	日本を愛したティファニー 名優・滝沢修と激動昭和 報道電報検閲秘史	河 出 書 房 新 社 新 風 新 舎 朝 日 新 聞 社
第54回 2006年	小 林 弘 忠 内 藤 初 穂 中島さおり	逃亡「油山事件」戦犯告白録 星の王子の影とかたちと パリの女は産んでいる	毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房 社 ポ プ ラ 社
第55回 2007年	植 村 鞆 音 畑 中 良 輔 山 口 仲 美	歴史の教師 植村清二 オペラ歌手誕生物語 日 本 語 の 歴 史	中 央 公 論 新 社 音 楽 之 友 社 岩 波 書 店
第56回 2008年	堤 未 果 山 本 一 生	ルポ 貧困大国アメリカ 恋と伯爵と大正デモクラシー	岩 波 書 店 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第57回 2009年	平 川 祐 弘 池 谷 薫	アーサー・ウェイリー 『源氏物語』の翻訳者 人間を撮る ドキュメンタリーがうまれる瞬間	白 水 社 平 凡 社
第58回 2010年	秋 尾 沙 戸 子	ワシントンハイツ GHQが東京に刻んだ戦後	新 潮 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第59回 2011年	田 中 伸 尚 内 田 洋 子	大逆事件 死と生の群像 ジローノの家 イタリア10景	岩 波 書 店 文 藝 春 秋
第60回 2012年	井 口 隆 史 小 池 光	安 部 磯 雄 の 生 涯 う た の 動 物 記	早 稲 田 大 学 出 版 部 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第61回 2013年	尾 崎 俊 介	S 先 生 の こ と	新 宿 書 房
第62回 2014年	後 藤 秀 機 佐々木健一	天才と異才の日本科学史 辞 書 に な っ た 男	ミ ネ ル ヴ ァ 書 房 文 藝 春 秋
第63回 2015年	磯 田 道 史	天災から日本史を読みなおす	中 央 公 論 新 社
第64回 2016年	阿 部 菜 穂 子 温 又 柔 原 彬 久	チェリー・イングラム 台湾生まれ 日本語育ち 戦後政治の証言者たち	岩 波 書 店 白 水 社 岩 波 書 店
第65回 2017年	鳥 海 修 原 田 國 男	文 字 を 作 る 仕 事 裁 判 の 非 情 と 人 情	晶 文 社 岩 波 書 店
第66回 2018年	内 藤 啓 子 新 井 紀 子	枕詞はサッチャン 一照れやな詩人、父・阪田寛夫の人生 AI vs. 教科書が読めない子どもたち	新 潮 社 東 洋 経 済 新 報 社
第67回 2019年	ドリアン助川 小 堀 鷗 一 郎	線 量 計 と 奥 の 細 道 死を生きた人びと 訪問診療医と355人の患者	幻 戯 書 房 み す ず 書 房
第68回 2020年	岩 瀬 達 哉 上 野 誠	裁判官も人である 良 心 と 組 織 の 狭 間 で 万葉学者、墓をしまい母を送る	講 談 社 講 談 社
第69回 2021年	さ だ ま さ し 柳 田 由 紀 子	さ だ の 辞 書 宿無し弘文 スティーブ・ジョブズの禅僧	岩 波 書 店 集英社インターナショナル

クラブ賞のご支援

今回も次の各社からご寄付をいただきました。
小学館 新潮社 日本放送協会 NHK 出版



へクラブ総会ハガキより

コロナ禍の世界的な大流行と、100年まえのスペイン風邪とは時代こそちがえ、その感染力の強さに驚くばかりです。しかし医学研究者たちの努力により、パンデミックにも収束への光がさして来たと実感しております。91歳を過ぎましたが元気にしております。

(高階 經和)

鶯の鳴き声嬉し散歩道

黄菖蒲池面を染めて囁けり

毎月の句会が楽しみです。ステイホームで盆栽をはじめました。花のあとに大きな実のなる木瓜、山もみじなど、毎日ながめています。

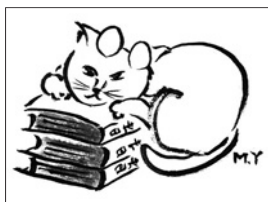
(砂原 和雄)

先日、鯨洲の試験場で運転免許証更新のための「認知機能検査」を受

けました。結果は青色の通知書で、総合点100点とありました。もの忘れに悩む80翁ですが、少しは自信ができました。

(中村 龍介)

制作したドキュメンタリー「デジタルハンター」謎のネット調査集団を追う」が、「科学ジャーナリスト賞」を受賞しました。(高木 徹)



『さだの辞書』は岩波の「図書」連載中に読み、本も昨春求めました。

石橋秀野のことが圧巻。さださんは津波後も岩手に見えているので親しく思います。『宿無し弘文』は、受賞を知ってすぐ本屋に行き、ただ一冊あった四刷を買いました。聞き書きにより、十方から光を当てて弘文の

彫像を描いた力作。選考各位の眼力に敬服いたします。(菊澤 研二)

昭和25年に出した文庫本「これまでは人のことかと思いに」(文芸社現在絶版)を、22世紀アト社から電子書籍Kindleに入れると同時に本としても再出版してはどうかという提案があり、全く同じものを再出版してもつまらないので、その後に書いたもの、若い頃書いたものから選んで入れ、エッセイ総集篇のような形で再出版しましたので、クラブにも一冊送らせて頂きました。

(町田 邦雄)

田中喜芳先生のS・ホームズ編で毎日を楽しく過ごしております。北欧、ヨーロッパ、南欧は、いつまでもなつかしいです。その味と共に。

(栗山 定幸)

コロナ禍ですが、早く平常の生活に戻り、例会などに出席させていただけの日が来るのを、願っています。「300字で書くエッセイ」を、また次の一冊を目標に書いています。

(並木きょう子)

太宰治、織田作之助をはじめ、芥川賞に落ちてもすぐれた作家はたくさんいます。落選作から「今読んで面白く」作品をセレクトした『芥川賞候補傑作選』（春陽堂）を刊行中です。戦前・戦中編につづき、平成編①②を出しました。

（鶏飼 哲夫）

この介護施設では休憩室に本が多く、100数冊を超え、読書を楽しむことができます。その他週刊誌などもホールにあり、結構楽しんでいきます。

（吉原 賢二）

二回目のワクチン接種も終え、今度は臨時の打ち方の応援に出かけております。苦勞の多い新型コロナウイルスの世界的パンデミックの中の無理矢理なオリンピック開催にも気乗りしませんですね。

（川田 志明）

自衛隊による大規模接種センターで、ワクチン接種を受け、久しぶりに大手町界隈を歩いてきました。ホッとして、少し気持ちが明るくなりました。

（深尾 凱子）

1月22日に核兵器禁止条約が発効

しました。残念ながら日本政府はこれに反対し、参加も批准もしないと広言しております。これは世界に対して恥ずべきことです。政府の方針を変えさす運動を強め、世論をもりあげるための署名を全国的に行って参ります。

（大岩 孝平）



私が所属する日本民放クラブの会報に、「私の放送人生」という企画ページがあり、その今月号に、私自身が体験した人生を記しました。TB

Sラジオから始まり、テレビマンユニオン創立に参加、その後40年にわたって放送に身を投じました。心燃える毎日…。寺山修司さんや山本直純さんなど多くの才能と出会った

日々を、今も懐かしく思い出しております。

（武本 宏二）

コロナ禍の中、やりたいこと、為すべきことは山ほどあるのに、6月をはじめ突然歩けなくなり「脊柱管狭窄症」と診断された！以来杖をついて歩いている。認知症の症状も、着実に進行、人名や言葉が出てこないことがしばしばだ。年は取りたくないですね。でも酒はうまい。

（森脇 逸男）

4月1日より、國學院大學に赴任しました。非常時下の赴任で、これも縁とっております。

（上野 誠）

コロナワクチン二回めが終り、気持ちだけは一安心しています。自粛、在宅続きで何か書きたい気分だけではありません。

（岡 佳津子）

世の中、コロナ↓五輪↓衆院選という単純かつオンリー・ワン思考。私は反対で『今ただちに解散総選挙。その結果で五輪実施の可否を決めるべし』との意見。この旨6月上旬に、有力なオピニオンリーダーに提起し

たが、スルー（無視）された。このテーマで、エッセイスト・クラブとしての意見をまとめて、世の中に発信するのも一興と考える。この種の発信については、日本ペンクラブ（桐野初女性会長）のほうから、従来から活発だと、私は感じていました。近況レンタルビデオ活用中…追憶↓卒業↓JFKいずれも名画です。

（菅野 光公）

岡山県庁の退職者会の「OBだより」に「新・相生橋」というコラムを書いて3年になります。コラムは読むものと思っていた者が、書く立場になり、苦心しています。

（柘野 健次）

間もなく九十一歳、人工透析のお蔭で生命を守っています。ただただ感謝の毎日です。

（渡辺 綱纜）

東京五輪のマラソンと競歩が猛暑を避けて札幌開催となり、見学の機会に恵まれました。9年後には札幌で冬季五輪があり、86歳の身でこちらも見たいと欲を出しています。

（若林 滋）

はじめての子供のための音楽作曲しています。朗読とアンサンブルのための音楽で、テキストを多和田葉子さんに書いてもらいました。12月ルクセンブルグでドイツの女優さんの朗読で初演します。（言葉はドイツ語です。）

（細川 俊夫）



私は今年92歳。コロナ禍に負けないうよう私が取り入れた対抗策は次の三点です。①毎日外に出て歩く。平均四千歩。②毎日自分で食事をつくる。③毎日、10分の「歌トレ」で好きな歌をうたう。

（山本思外里）

2018年に、谷村鯛夢の企画・編集・構成で刊行した「陰翳礼讃」（谷崎潤一郎）パイインターナシヨナ

ル刊が、2021年夏に8刷となった。これは、我々が若い頃に感銘を受けた名著を現代の若者にも読んでもらおうという狙いで、写真家大川裕弘氏の作品と文章をコラボさせたもの。昨年、同様に出した「邪宗門」（北原白秋）も好評。今の若者も捨てたものじゃない。

（谷村 鯛夢）

隠岐の島ブルース
青い海原 石路香る

虹の彼方に 隠岐の島

涙止まらぬ 切ない夜は

隠岐においてと言ったひと

袖を濡らした別れの涙

あゝあゝ隠岐の島ブルースよ

隠岐の島の知夫里島、人口約六百人の観光大使です、人情豊かな島です。詩は私です。カラオケで唄えます。

（道脇 弘俊）

めっきり出歩くことが少なくなり、運動不足で少々太りすぎ。動きが鈍くなると感性も鈍るようで、月2編のコラムに苦勞するようになりました。

（野中 康行）

一昨上年上梓した『画執の人』（六耀

社）は、日本画家だった義父・東丘と山下りん（イコン画）、木村武山（日本画）との若き日の絆を書いたものです。日本美術史に埋もれた知られざるエピソードを綴りました。最近になり、直木賞作家の方や大手出版社からのご連絡・問い合わせで、その内容が、小説に登場することが分かりました。創作となると、どういう人物像になるのか、身内だけに戸惑いもあります。（海老沢小百合）

旅と本と映画が人生。本は読んでいる。映画はテレビの画面で観ている。が、海外への旅は昨年の2月でストップ。214回目の海外への旅を計画しているのだが、いつになるのだろうか。（秋山 秀一）

江戸時代に掘られた千川上水の清流復活の状況を観て来ました。武蔵野から巢鴨までの開水路だったものが、今わずかに上流5kmに下水道の処理水が流され、鯉が元気に育っていました。東京の市街地にうるおいある清流を増やしたいです。

（坂本 弘道）

2021年、今年は世界史年表でもゴシック体で書かれるであろう変化の年です。世界は大きくゆれ動き、コロナ、オリンピックと話題は多いです。日本の政治、経済ともに衰え後進国になる等と。マスコミがしつかりせねばと存じます。

（佐々木満里子）



「農民文学」の編集長を務めており、9月25日付で328号を発行します。（三島 利徳）

2021、秋、冬、公開映画。タナダユキ監督「浜の朝日の嘘つきどもと」、奥田裕介監督「誰かの花」の撮影をしました。（吉行 和子）

今年3月に拙著『キツネ目ーグリ

コ森永事件全真相』が刊行されました。別便にて献本させていただきます。（岩瀬 達哉）

昨年、「漱石と鉄道」（朝日新聞出版）を刊行しました。（牧村健一郎）専修大学でズームを使って講義をしました。8月に埼玉県立盲学校の教員研修をズームで行います。

（三宮麻由子）

「はなれ瞽女おりん」（水上勉）の朗読に備え、上越新幹線上越妙高駅から「瞽女ミュージアム高田」へ。帰路、妙高連山を前に同駅のパノを高齢の女性が弾いていた。映画「昼下がりの情事」のBGM「ファシネーション」を情感込め奏でる。私は「愛の賛歌」を所望。ささやかな満足感を覚えた小旅行だった。（栗生 将信）この十二月で起業から丸三年になり、デザイン及び商売をする脳から物を書く脳への変換に苦しんでいます。思っていたよりずっとデリケートな脳とのつき合い方が、これからはばらくのテーマになりそうです。

（甘里 君香）

伝統藝能の昨今を眺めると、「これだけは絶対に観たい」と思わせるものが、次第に少なくなっているような気がします。「藝」は長い年月をかけて成せるもので、「便利」「早い」のデジタルは、どうも似合わないと思います。これも年のせいでしょうか。

(山川 静夫)

あと一カ月、百まで生きてお願いとバりに住む孫娘のポルトレ電話。来春には曾孫が生まれるらしい。

(村尾 清一)

傘寿を若者たちに祝ってもらい、もうひとがんばりしようと思っています。「わが回想」を自費出版いたしました。クラブ室にお届け申し上げます。

(大高 英昭)

長年続けてきた講座が、昨年末以来中止、6月からようやく再開と喜んで、またしても中止。成人学級も急遽オンラインになったり、コロナ禍に振り回されています。オンライン環境が整っていないのでという受講生の方も多く、文化の共有もIT次第というのではあまりに寂しく

思います。

(堀尾眞紀子)

今年九月で満九十六歳になります。「認知症」にはなりたくありませんので、つたない「エッセイ」を綴って頭の体操を心掛けています。題名は「上皇后様となられた美智子様のご実家正田家の方たち」、「晩年の十年間、流星と流星刀の研究に没頭した榎本武揚」などです。(森本 貞子)



約40年前、『聖母病院の友人たち』(新潮社)でエッセイスト・クラブ賞をいただいて以来、聖路加、東大病院、慈恵医大、杏林医大、昭和医大…と、手術・入院でお世話になった病院は十指にあまる。受賞作には「肝疾患者の学んだこと」というサブタイト

ルがついていたが、病名も肝硬変のほか、大腸ガン、間質性肺炎、脾臓腫瘍…など五臓六腑プラスアルファ。そういえば著書名には「死を看取るころ」(講談社)も。「生・病・老・死」と人生の四季を賞でながら生きてきた証左である。(藤原 作弥)

歯科、耳鼻科、循環器内科、呼吸器内科、整形外科、泌尿器科、皮膚科の医者に掛かっています。年を取ってこんなに忙しい仕事待ち構えているとは思いがけないことでした。(中村 政雄)

コロナワクチンでは、思いがけず、へとへとに疲れ果てました。

(小塩 節)

目下、「17才で『5つの世界』」をとりまとめ中です。(1)小・中学時代―農家の手伝い、暗渠排水作業など(2)中学時代後半―石川県南の工場で兵器部品の生産(3)海軍経理学校時代―明石海峡で遠泳中、足がつる。鉄拳150発(4)四高時代―能登の炭坑で、岩石落下の危機(5)金沢で、尼寺の一室借りて自炊生活、尼さん

達の生活を知る (倉部 行雄)

大正期の読売新聞紙上の「身の上相談」のまとめをしなくてはならない、古稀を超えてしまった。窪田空穂が記者として回答した一部分に、足を止め熱中してしまっただけである。何としてもまとめ上げたい。

(白井 和恵)

世田谷区民はワクチン難民。5月1日に予約したのに実際の接種は6月末、2回目は7月中旬。区行政に不満を持ちつつ、ライフワークの魔女ものの創作に日々パソコンを打っています。

(松田 宣子)

相変わらず府中市の万葉集の講義と筆ペン教室の指導に追われています。コロナの関係で日程が目まぐるしく変わり、ドタバタしています。今年には毎日書道展に出品できました。

(今野 耕作)

「株式会社アメリカの日本解体計画」(経営科学出版) 刊行。

(堤 未果)

体調を崩し、自宅と同じ杉並区永福の「チャームプレミア永福」に入居し

ています。自宅はそのまま、「スーパーセコム」に守られ、週一回見回りの者が郵便物を入居先に届けてくれますので、従来通り永福町の自宅宛に郵便はお願い致します。(中名生正昭)

自著紹介

『町村金吾の二十世紀』

若林 滋著

町村は一九〇〇年(明治三三)札幌生まれ。旧制二高、東大法を出て内務官僚。宮内大臣秘書官の時二・二六事件に遭遇、銃撃された鈴木貫太郎侍従長に名医を紹介し救命、岡田啓介首相救出にも一役かう。事件は軍部に利用され、戦争体制進み太平洋戦争開戦へ。

内務省警保局長の時、中野正剛逮捕命令を拒み東條首相と対立。



富山、新潟知事を経て警視總監として鈴木首相と共に終戦工作、玉音放送のあと退任する。初代はトバス社長を公職追放で辞め、解除後国会議員。自治大臣等の後、道知事に三選され青函トンネルを実現した。町村九二年の生涯を辿れば日本の二十世紀が分かる。元衆議院議長町村信孝は二男。

(中西出版 2400円+税)

ご寄贈と自著紹介のお願い
刊行から概ね1年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、2500字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。

2021年度定期総会

当クラブの2021年度定期総会は、6月28日、日本記者クラブでクラブ賞贈呈式に先だって開かれ、新年度予算、同事業計画など4議案が提案通り賛成多数で可決、承認されました。

総会は新型コロナウイルス感染防止の観点から前年度と同様、会員全員の出席までは求めず、原則として書面（郵送）による議決権行使と委任状を審査、採決する方式で行われました。

郵送で届いた議決権行使の書面は125通、議長への委任状は43通の計168名と、会員数（280名）の過半数に達し、総会は成立しました。

採決の結果、2020年度事業報告、同年度決算報告、2021年度事業計画、同年度予算の計4議案は提出通り採択されました。

2021年度予算総額は、前年比

20万円減の942万円。コロナ禍の影響で事業計画が立てにくい状況にあることから、会議費、理事・例会費等を大幅に削減する一方、収入面では特別維持会費の寄付収入を見込んだうえ、さらに剰余金からあらかじめ70万円を繰り入れるなど、前年度に引き続き、苦しい編成となりました。しかし、こうした経費削減等にはやはり限界があります。

そこで新年度の事業計画では、今年も全会員を対象に「特別維持会費」の寄付を呼びかけるなど一層の収入の道を探り、財務の健全化を図ることを緊急の課題として取り上げています。

前年度決算、本年度予算の詳細は38、39ページに掲載しています。



遠藤会長

「特別維持会費」ご寄付のお願い

クラブ総会に提案、承認されました通り、今年も会員の皆さまから「特別維持会費」のご寄付を募ります。できるだけ多くの方々のご協力をお願いします。当クラブではクラブ賞選考、会報発行、例会開催などの活動を行っておりますが、資金運営は年ごとに苦しくなっております。クラブ収入は会員各位にお納めいただく会費のほか、主に新聞、テレビ、出版など各社からの支援に頼っています。しかし、マスコミ各社の経営環境は依然として厳しく、十分な支援は得にくくなりました。同じ理由でエッセー集の編集・監修などによる収益も見込めない状況です。

理事会では今回も会費引き上げを検討しましたが、やはり任意の寄付が妥当との結論になりました。「特別維持会費」ご寄付の呼びかけは2013年以降、7回目です。前回は92名の方々から計25万5千円の浄財が寄せられ、クラブ運営に大いに役立てられました。

一口1万円以上で、ご協力くださるようお願い申し上げます。もとよりクラブ役員、クラブ賞選考委員は無報酬ですが、なお一層、クラブ運営の経費節減に努めてまいります。

日本エッセイスト・クラブ
会長 遠藤 利男
理事会一同

例会について

通常は6、7、8、1月を除く毎月、明宏ビル6階のクラブ室で午後3時から5時まで、ゲストをお招きして懇親の例会を開いて参りました。しかし、昨年1月に新型コロナウイルスの感染が国内で初めて確認されて以来、感染拡大が憂慮される状況が続き、例会および新年会は中止しております。

再開は感染の状況を見定めて、後日お知らせいたします。

2021年度理事会報告

第1回理事会（21年6月28日）

- ・ 会員の現況報告
- ・ 本日の贈呈式について
- ・ 次期審査委員会委員長
- ・ ホームページの改革について
- ・ その他

事務局から

新会員の紹介

さだまさし(さだ・まさし)氏

第69回日本エッセイスト・クラブ賞受賞者。詳細は13ページに。

柳田由紀子(やなぎだ・ゆきこ)氏
第69回日本エッセイスト・クラブ賞受賞者。詳細は17ページに。

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知り合いなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いいたします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の

承認を求めることになっていきます。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論・ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

7月現在の正会員は215名です。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、新型コロナウイルスの影響で在宅勤務などもありますので、なるべく郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。

(理事会)

維持会費ご寄付のお礼

2021年6月末までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

藤原 房子	森脇 逸男
佐藤 幸子	森本 貞子
遠藤 利男	大井 玄
稲畑 汀子	東畑 朝子
太田 愛人	長屋 龍人
加藤 恭子	大村 智
中村 政雄	野見山 曉治
縫田 曄子	松田 宣子
岸 恵子	若林 滋
澤地 久枝	畑 正憲

会員近況投稿のお願い

会員近況欄への投稿を歓迎いたします。字数は80字程度。エッセーおよび近況欄へのご感想なども事務局までお寄せください。

9月末まで

エッセーを募集しています

会員の皆さまのエッセーを募集中です。一昨年から電子版となった会報「冬」号（11月下旬発行予定）に掲載します。

応募エッセーは11年連続11回目の企画です。電子版への模様替えは、印刷等の経費節減とともに、会報を広く社会に発信することを趣旨としております。応募要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ新しく入会された方々には自己紹介、近況報告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募くださるようお願いいたします。なるべく多くの会員の作品を

発表するため、2年（2回）連続の応募はご遠慮いただいております。

なお、当クラブのホームページで昨年の会報冬号のエッセーがお読みいただけます。

応募要領

- 一、テーマは自由です。
 - 一、本文は1600字。
 - 一、2000字以内の略歴を添付してください。
 - 一、できるだけ、メール添付でお願いします。
 - 一、応募原稿は原則としてご返却いたしません。
- ※詳しくはクラブ事務局まで。

会員からの寄贈著書

大高英昭氏著『わが回想 ソクラテス半世紀の軌跡（その後）』

岩瀬達哉氏著『キツネ目 グリコ森永事件全真相』

町田邦雄氏著『エッセイ総集編 これまでは人の事かと思いに…』

森 孝之氏著『次の生き方 Vol.2 自然に寄り添う人たち』

船木拓生氏著『俠気の生態学 牧野四子吉と文子の鮮やかな日々』

菅野光公氏著『改訂版 核兵器ではなく花をください』

若林 滋氏著『町村金五の二十世紀』
※みやざきエッセイスト・クラブから『上を向いて歩こう』作品集25のご寄贈がありました。

（4月から7月上旬まで）

2020年度 会 計 報 告

自2020年4月1日至2021年3月31日

支 出 の 部			取 入 の 部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
給料手当	事務局職員手当	2,640,000	クラブ会費	正会員・法人会員	5,795,000
郵 送 費	郵 送 費	358,516	総会等会費	総会・例会会費	0
印 刷 費	会報他印刷費	826,100	寄付金収入	特別維持会費他	3,230,000
会 議 費	総会等会合費	174,426	雑 収 入	会報広告代他	40,000
理事・例会費	理事会・例会費用	33,210	受取利息	定期・普通・利息	249
クラブ賞賛金	クラブ賞・賞金	600,000	小 計		9,065,249
図 書 費	クラブ賞審査図書	103,710	監 修 料		0
交 通 費	通勤交通費他	137,360	印 税 収 入		0
交際・慶弔費	慶 弔 費	32,866	還付所得税		0
通 信 費	電 話 料	116,120	小 計		0
手 数 料	振替貯金手数料	74,589	繰 入 金		700,000
賃 借 料	クラブ借室料	3,498,000			
光 熱 費	電気・水道料	143,505			
事 務 費	事務用消耗品費	99,674			
備 品 費	コピーリース代	11,880			
租 税 公 課	都民税・源泉税	85,530			
福利厚生費	社会保険料等補助	240,000			
雑 費		18,539			
予 備 費		230,120			
小 計		9,424,145			
剰 余 金		341,104			
合 計		9,765,249	合 計		9,765,249

<注>予め剰余金から70万円を繰り入れているため、実質的な赤字は35万円余となる。

貸 借 対 照 表

2021年3月31日現在

資 産 の 部			負債及び純資産の部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
現 金	手 許 残 高	2,801	基 本 財 産		6,000,000
普通預金	みずほ銀行A	114,397	繰越剰余金		155,574
普通預金	みずほ銀行B	6,672	当期欠損金		▲358,896
普通預金	みずほ銀行法人	0			
普通預金	ゆうちょ銀行	8,808			
定期預金	みずほ銀行	3,000,000			
長期預け金		2,664,000			
合 計		5,796,678	合 計		5,796,678

2021年5月19日

監 事 大高 英昭 監 事 今野 耕作

2021年度予算

収 入

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
正会員会費	3,300,000	3,300,000	会費収入 14社
法人会費	3,000,000	3,090,000	
小 計	6,300,000	6,390,000	
総会等会費	259,000	309,000	総会・贈呈式、例会等会費 クラブ賞賛助金、維持会費等 会報広告代、クラブ室使用料 みずほ銀行（定期・普通預金）
寄付金収入	2,000,000	2,000,000	
雑収入	150,000	200,000	
受取利息	1,000	1,000	
小 計	2,410,000	2,510,000	
監修料	0	0	出版物複写による著作権使用料
印税収入	10,000	20,000	
還付所得税	0	0	
小 計	10,000	20,000	
繰 入 金	700,000	700,000	
収入合計	9,420,000	9,620,000	

支 出

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
給料手当	2,640,000	2,640,000	事務局員1名
郵送費	420,000	440,000	
印刷費	800,000	750,000	会合通知、会報、図書等の送付代 会報（冊子2回・電子版1回）、封筒等
会議費	270,000	450,000	
理事・例会費	80,000	130,000	総会・贈呈式会合費等 会合費、例会ゲスト車代
クラブ賞賛金	600,000	600,000	
図書費	100,000	100,000	賞金総額 クラブ賞審査図書費
交通費	140,000	140,000	
交際・慶弔費	30,000	30,000	事務局員通勤費等 弔電等
通信費	110,000	110,000	
手数料	75,000	55,000	電話・FAX・インターネット料金 郵便払込料金（会費）、振込手数料
賃借料	3,500,000	3,450,000	
光熱費	150,000	170,000	クラブ室賃借料、共益費等 電気、水道代
事務費	120,000	170,000	
備品費	15,000	15,000	事務用品、コピー用紙、新聞購読料 コピー再リース代
租税公課	80,000	80,000	
福利厚生費	240,000	240,000	法人住民税等 社会保険料等補助
雑費	20,000	20,000	
予備費	30,000	30,000	日用品、置き薬代等
支出合計	9,420,000	9,620,000	

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指すとし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男				
理事長	(空席)				
専務理事	秋岡伸彦				
常務理事	栗田 亘	原田 國男			堀尾眞紀子
	よしだみどり				
理事	秋山 秀一	梅津時比古			高村 壽一
	土井成紀	中丸 美繪			深尾 凱子
	藤原 作弥	藤原 房子			降幡 賢一
	松田 宣子	森脇 逸男			
監事	大高 英昭	今野 耕作			
事務局長(兼)	降幡 賢一				
名誉会長	村尾 清一				
	*	*			*

会 員 名

(2021年 8 月 1 日現在 280名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤
上野 創	上野 誠	白井 和恵	鶉飼 哲夫	内池 正名
内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏
遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小塩 節
小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄
大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩	大空 博	大平 常元
大高 英昭	大谷 克弥	大槻 茂	大場 司	大村 智
大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子	岡島 成行	岡田 恵美子
岡田 直敏	奥山 俊宏			

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	北原 歌子	城山 邦紀
儀同 保	菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三
北村 行孝	久我 なつみ	久谷 與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄
倉本 宗剛	栗生 将信	栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信
古庄 ゆき子	小池 光	小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子
小林 和男	小松 浩	児島 宏子	後藤 秀機	今野 耕作
紺野 猷邦				

さ行

さだまさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保 田芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎
三宮 麻由子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子
杉江 弘	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 章一
鈴木 博	砂原 和雄			

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田村 秀敏	田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹
高榎 堯	高階 經和	高島 肇久	高橋 祥友	高村 壽一
竹内 一正	竹中 淑子	武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢
俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷 真一
D・ゾペティ	出久根 達郎	ドリアン 助川	土井 成紀	戸田 桂太
戸田 淳子	鳥羽 欽一郎	東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸
富永 孝子	富山 和子	鳥海 修		

な行

内藤 啓子	中島 さおり	中野 利子	中名生 正昭	中丸 美繪
中村 史郎	中村 登紀夫	中村 政雄	中村 龍介	中山 士朗
永井 梓	長井 好弘	長田 亮一	長友 佐波子	長野 安恒
長屋 龍人	鍋島 高明	並木 きょう子	二宮 正之	蜷川 真夫
縫田 嘩子	野中 康行	野見山 曉治		

は行

葉山 美知子	羽中 田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子	廣野 眞一
深尾 凱子	福田 章	福田 はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀尾 眞紀子

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村 健一郎	正籬 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松本 仁一	萬年 浩雄	三島 利徳
水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好
宮崎 佳代子	村尾 清一	村松 賢一	望月 照彦	桃井 恒和
森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志	森 美可
森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男		

や行

八百板 洋子	八木 美雄	矢吹 清人	安鳴 明	柳生 尚志
柳澤 嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田 由紀子	山川 静夫
山形 孝夫	山岸 健	山口 寿一	山口 伸美	山下 健
山藤 章二	山室 寛之	山本 一生	山本 思外里	よしだ みどり

養老 孟司 横山 昭作 吉岡 純子 吉野源太郎 吉原 賢二
吉行 和子

わ行

若林 滋 脇 祐三 渡辺 綱纜 渡辺美佐子 渡邊 満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	集英社
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2021 秋 (No.73-1)

2021年8月26日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSプロウディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価 各1,100円(税込) ★は定価 1,430円(税込) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツアトラウストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤 孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パルバース
ブッダ 真理のことは	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田 好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島 茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクフル 夜と霧	諸富祥彦
サン＝テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木 閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎
万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美

紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブッダ 最期のことは	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禪
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島 茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂 武
カント 永遠平和のために	萱野稔人
ダーウィン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平
バートランド・ラッセル 幸福論	小川仁志
三木清 人生論ノート	岸見一郎
法華経	植木雅俊
宮本武蔵 五輪書	魚住孝至

ne
CLUB